

中国人児童による日本語格助詞の発達過程の記述

—来日後4ヶ月間の記録—

A Detailed Description of the Development of Japanese Case Markers in a Chinese Boy

— The First Four Months —

白畑 知彦ⁱ・久野 美津子ⁱⁱ

Tomohiko SHIRAHATA and Mitsuko HISANO

(平成19年10月1日受理)

要旨

中国人児童1名(L児)の来日後4ヶ月間の日本語の発話データを整理し、8種類の格助詞の発達を記述的に記した。その結果、以下の点が明らかとなった。(a)「から」以外の格助詞、「が」「を」「に」「の」「で」「と」「へ」から、助詞の脱落現象が観察された。脱落が最初に観察された時期は、適格構造が出現する前、あるいはそれと同時であった。(b) 適格構造の発話時期は格助詞によって異なっていた。比較的早く発話されたのは「の」であった。これに対し、「へ」「まで」「より」の適格表現は、習得の最初の4ヶ月間では観察されなかった。(c) 誤りには脱落の他、「を」「の」では過剰生成の誤りが、「が」「を」「に」「の」「で」「と」「から」「へ」では代用の誤りがそれぞれ観察された。代用された助詞は「*は」「*へ」「*の」「*が」「*に」「*で」であり、このうち「*は」「*の」は多くの格助詞の代用として用いられていた。

こういった特徴のうち、(a)に関しては、格助詞の発達過程の最初期に脱落が見られるという点で、先行研究と同様の結果となった。また、(b)(c)について、格助詞の出現順序や誤りの傾向で、やはり先行研究と類似していた。これまで、全ての格助詞を対象に、脱落を含めて調査を行なった研究はない。そのため、様々な格助詞の発達過程の最初期に脱落があることを明確にした本結果は、児童を含めた第二言語学習者の格助詞の発達過程を解明する上で重要な証拠となる。本研究結果は、今後、第二言語としての日本語の格助詞の習得過程を理論的に説明する上でも大切な基礎資料となるだろう。

1. 序論

本論文は、日本語を第二言語(L2)として習得していった中国人児童(L児)の発話データを基に、格助詞の習得に焦点を当て、その発達過程を記述的にまとめたものである。L2として日本語を学ぶ学習者にとって、格助詞は困難な学習項目であることが知られている(野田他、2001)。格助詞に関する習得研究は、1990年代以降盛んに行われるようになり、これまで数多くの事例が報告されている(迫田、1990; 松田・斎藤、1992; Yagi、1992; 白畑、1993; 井内、1995; 久保田、1994; 八木、1996; 松本、

ⁱ白畑知彦：静岡大学教育学部

ⁱⁱ久野美津子：静岡大学国際交流センター

1998、2000；今井、2000；久野、2003；白畑・久野、2005)。格助詞は種類が多く、また、1つの格助詞でも用法が多岐にわたるものもある(小川他、1982；益岡・田窪、1987)。このことから、格助詞の習得研究は、格助詞の種類や用法を限定して行われることがほとんどである。個々の格助詞に焦点を当て、発達過程を詳細に記すことはもちろん重要なことであるが、一方で、数多くの格助詞の使用状況を全体的に記述し、その特徴を把握しておくこともまた、重要であると思われる。これまで、格助詞全てを取り上げ、使用状況を調査した研究も見られるが、分析方法に関して、習得データの期間の区切り方が大まかであるため発達過程が明確でない、あるいは、格助詞の脱落したデータを分析対象としていないなど、格助詞の発達過程の全容を知るには十分とは言えないものが多い。そこで、本稿では、中国人児童であるL児の発話データを基に、彼の格助詞の使用状況を調査し、格助詞全体の発達過程を記述して行くことにする。本稿では、習得の最初期の格助詞の使用を把握することが目的であるため、来日後4ヶ月間の発話データに絞って分析を行いたい。

2. 格助詞の種類と用法

本稿では、小川他(1982)、益岡・田窪(1987)を参考に、「が」「を」「に」「の」「で」「と」「から」「へ」「より」「まで」の10種類を格助詞として考える。これらの格助詞の基本的用法と用例は(1)のとおりである。ただし、「の」の準体助詞の用法(例：太郎が来るのを待つ)は調査対象としなかった。

(1) 格助詞の基本的用法と用例

- ①「が」(a)主体：先生が来た。(b)対象：私は寿司が好きだ。
- ②「を」(a)対象：手を洗う。(b)通過場所：廊下を歩く。
(c)経過時間：時間を過ごす。(d)起点：保育園を卒業する。
- ③「に」(a)存在場所：私は家にいる。(b)所有：私には車がある。
(c)時、順序：誕生日に花を贈る。(d)動作主：先生に叱られる。
(e)到達点：ここに座る。(f)変化結果：秋になる。
(g)授受を行う相手：母に花を贈る。(h)対象：学校に遅れる。
(i)目的：買い物に行く。(j)原因：寒さに震える。
(k)志向対象、基準：味にうるさい。
- ④「の」(a)所属先：父の帽子 (b)性質：木の机 (c)数量：3人の友達
(d)主体：父の笑い声 (e)対象：絵の勉強 (f)所：壁の絵
(g)時：誕生日の夜 (h)動作・過程・状態等の主体：風の強い日
- ⑤「で」(a)動作場所：公園で遊ぶ。(b)手段・道具：電車で行く。
(c)原因：風邪で休む。(d)材料：紙で作る。
(e)動作時間・時：1時間で終わる。(f)動作状態：片足で歩く。
(g)動作主体：私達でやっておく。
- ⑥「と」(a)共同的行為の相手：彼と喧嘩した。(b)共同行為者：母と一緒に帰る。
(c)比較基準：年齢は彼と同じだ。(d)変化結果：無駄となる。
- ⑦「から」(a)起点：階段から落ちる(b)受取る相手：銀行から借りる。
(c)原因・判断基準：別の視点から考える。(d)原料：米から酒を作る。
(e)動作や状態の始まる時：明日から出張だ。

- ⑧「へ」 方向・目的地：学校へ行く。
- ⑨「より」(a)比較基準：昨日より暑い。(b)場所、時間の起点：3時より始める。
- ⑩「まで」動作・作用等の及ぶ先、行きつく先：東京まで行く。

3. L2 先行研究

L2 学習者の格助詞習得に関する研究のうち、幼児や児童の格助詞を調査したものに限って見れば、格助詞全てを調査対象とし、初出時期、使用頻度、誤りなどを報告している代表的なものとして松本 (1998、2000)、竹中 (2001) があげられる。そこで、本稿では松本 (1998、2000) と竹中 (2001) による研究結果を以下にまとめる。

3.1 松本 (1998、2000)

松本 (1998) は中国人児童1名の約11ヵ月間 (来日2~49週目、9歳4ヵ月~10歳3ヵ月) の発話データを基に、格助詞、終助詞 (例：よ、ね)、接続助詞 (例：て、が)、係助詞 (例：は、も) の初出時期、使用頻度、誤りを調査した。また、松本 (2000) は松本 (1998) と同一被験者による約2年間 (来日2週目~100週目) の発話データと作文データから、様々な助詞の使用状況を用法別に分析したものである。彼女のデータを基に格助詞の初出時期をまとめたものを表1に示す。この表から、「に」「の」の出現は比較的早く、「へ」「より」は遅いことがわかる。

表1. 松本 (1998、2000) による格助詞の初出時期

観察週	13週	17週	24週	27週	58週	89週
格助詞	に	の	が、を、と、で	から、まで	へ	より

松本 (1998) は格助詞の主な誤りとして、「に」と「で」の混用、「を」と「が」の混用、他の格助詞を「の」や「に」で代用したもの (例：*ここのいない)、「の」過剰生成 (「 ϕ 」の箇所に格助詞を付与したもの) などが観察されたと述べている。また、「を」「へ」が適切に使用できるまでには時間がかかったと述べている。さらに、松本 (2000) では、類似した用法を持つ格助詞間で混用が多かったことを指摘している。それらの混用とは、「が (主語)」と「を (対象)」、「に (存在場所)」と「で (動作場所)」、「に (存在場所)」と「を (移動範囲)」、「から (開始時間)」と「に (時点)」、「から (動作始点)」と「に (到達点)」、そして「で (動作場所)」と「を (移動範囲)」などである。

3.2 竹中 (2001)

竹中 (2001) はタガログ語を母語とする男児1名の約1年間 (来日2週目~53週目、調査開始年齢11歳7ヶ月) の発話データを基に、助詞の初出時期や誤りを調査し、インドネシア語を母語とする成人学習者の発話データとの比較や、先行研究との比較をしている。竹中のデータを基に被験者の格助詞の初出時期を示したものが表2である。なお、「へ」「より」は観察期間中には発話されなかった。

表2. 竹中 (2001) による格助詞の初出時期

観察週	16週	18週	19週	21週	22週	26週
格助詞	が、に	の、と	で	から	を	まで

格助詞の使用の特徴について、「が(主体)」「に(存在場所、到達点)」「で(手段)」「から(起点)」は初出が早い格助詞であることや、場所を表す格助詞は「に」、「で」の順に出現したことなどが報告されている。また、誤りの特徴として、他の格助詞を「の」や「が」で代用する誤り(例:*これが買った)、「の」の過剰生成、場所を表す「に」と「で」の混用、対象を表す「に」と「を」の混用、聞き返す時の「は」の過剰生成(例:*これは?)、「～になる」を固まりとして用いる点などをあげている。さらに竹中(2001)は松本(2000)の結果も考慮し、日本語学習経験のない児童が助詞を使用し始めるのは来日4ヵ月目頃であると述べている。

3.3 松本(1998、2000)と竹中(2001)の問題点

松本(1998, 2000)と竹中(2001)の調査は、被験者の習得開始から1～2年間に得られたデータを中心に、習得の実態を明らかにするための貴重な報告をしている。しかし、調査方法に関して問題点も残されている。1つ目の問題点として、彼らの研究は、調査項目が多い割には実際の発話例があまり記載されていない点があげられよう。これらの研究目的には助詞(格助詞、係助詞、接続助詞、終助詞)の使用実態を明らかにする点があげられている。助詞の使用実態を明らかにするには、いつ、どのような助詞を、どのように用いたか、あるいは用いなかったか明記することが重要である。そのためには、発話データを数字や表などで示すだけでなく、発話例も多く記すことが必要であり、誤りだけでなく正用例も記す必要があると思われる。しかし、これらの研究で記されている発話例のほとんどは助詞のうち格助詞に関するものであり、その多くが誤りの例である。仮にこれが紙面の都合上の理由によるのであれば、調査項目を絞る必要もあったと考えられる。

2つ目の問題点は、松本(1998、2000)も竹中(2001)も格助詞の脱落した発話データを分析対象としていない点である。格助詞の脱落は誤りの一形態であり(迫田、1990;石田、1991;松田・斎藤、1992;久保田、1994)、脱落現象は発達段階の一部として当然考慮すべきものである(白畑、1993、2001;久野、2003;白畑・久野、2005)。例えば、久野(2003)では、ブラジル人幼児2名の18ヵ月間の発話データから、存在場所「に」と動作場所「で」の使用状況を調査し、発達過程の最初期に格助詞を使用しない段階があることを報告している。また、白畑・久野(2005)では、児童3名(中国語母語話者1名、英語母語話者2名)を被験者に、名詞句構造内での「の」の発達過程を縦断的に調査した。その結果、まず「の」を付与しない段階、次に「の」を付与する段階があることが確認されている。このように、格助詞の脱落している発話までもその調査対象としなければ、格助詞の本当の使用実態や発達過程を知ることができないと考える。

以上の点を踏まえ、本稿では、格助詞の脱落も含めた発話データを調査対象とする。そして、実際の発話例を掲載するには、誤りの例だけでなく、適切に使用されている例もできるだけ多く載せたいと考える。また、脱落の有無やそれらが観察された時期、正用の出現時期や順序、誤りの種類や傾向などについて、先行研究と比較しながら論を展開する。

4. 被験者とデータ収集方法

前述もしたが、被験者のL児は中国人の男児である。10歳3ヵ月の時、両親と中国から来日し、静岡市に住むようになった。来日前の日本語学習歴は全くなかった。1994年8月上旬に来日し、翌9月から同市内の小学校へ通い始めた。滞在1ヶ月目にあたる8月は小学校が夏休みだったため、L児は同級生や教師との交流はなかった。しかし、母親(中国語母語話者)が日本語に堪能だったため、この時期、

家庭内で彼女から、日本語での挨拶表現や自己紹介などを習っていた。しかし、それ以外には、L児はこの時期に日本語との接触はない。来日2ヶ月目から小学校に通い始め、主として、教師やクラスメート達と交じり合うことにより日本語を習得していった。

表3に、本稿で扱うデータについて、L児への観察日、彼の滞在月数および年齢がまとめてある。分析対象としたデータは、L児の滞在1～4ヶ月目の4ヶ月間の発話データであるが、実質的には2ヶ月目からのデータを分析することになる。本稿の第1著者を含む観察者達は、学年暦の2学期が始まった9月より、原則として1週間に1度、L児の通う小学校を訪問し、彼らとL児との自由会話をテープレコーダーに録音し、それを文字化した。これが本稿で分析する発話データである。1回の録音時間は100分程度であった。

表3. データ収集背景

滞在月数	観察月日	観察回数/月	年齢
1ヶ月目	なし	0回	10歳3ヶ月
2ヶ月目	9月16日、24日、30日	3回	10歳4ヶ月
3ヶ月目	9月7日、14日、21日、28日	4回	10歳5ヶ月
4ヶ月目	9月4日、11日、18日、25日	4回	10歳6ヶ月

本稿で分析の対象としたデータは、上記(1)に記した10種類の格助詞である。便宜上、1ヶ月を1単位として発達過程を見ていくことにする。分析対象はL児の発話データであるが、彼が日本語の文章を読んでいる場合や、他者の発話を単に繰り返した場合などは分析の対象外とした。前述したとおり、本稿の分析には当該文脈で適格に発話された格助詞の使用のみならず、他の助詞による代用、過剰生成、脱落(「 ϕ 」)も含むことにする。格助詞の使用が不適格な場合には、発話例の文頭に(*)を付した。

ただし、日本語の口語表現では「が」「を」のように、文脈によっては省略可能なものや、「へ」と「に」(例:日本へ/に來た)のように、意味的には異なるものの、同一の文脈で使用しても文法的には両方とも適格になるものもある(益岡・田窪, 1987; 丹羽, 1990; 長谷川, 1993; 野田他, 2001)。そのため、省略可能な格助詞の脱落や、「へ」を「に」で代用したものなどは正誤判断が困難となる。そのような分析の困難さが生じるが、本稿では便宜上、上記(1)の基準にしたがい、省略可能な場合であっても脱落とみなし、基本的用法と異なるものは代用として処理することにした。脱落が省略可能な場合は「 ϕ 」、誤りになる場合は「* ϕ 」と記した。¹また、ある学習項目の発達過程において、ある段階で不可解な発話や誤りが見られるという報告もあるため(Hawkins, 2001)、格助詞を使用してはいるが分析困難なデータも「分析困難」として記した。

5. 結果

観察結果は表4～表11に示す。実際の発話例は(2)～(9)に記す。表中の数字は、使用回数、()内の数字は各月の合計が5回以上ある場合の割合(%)である。また、各表の中で、例えば「*に→と」という意味は、当該文脈でL児は「*に」と発話しているが、本来使用すべき格助詞は「と」であることを表している。また、「 ϕ →が/は」とは、L児の発話で格助詞が脱落しているが、本来「が」「は」のいずれかが使用されるべき文脈であることを表す。さらに、格助詞が、ある特定表現(chunk)の中で使用されている場合(例:気持ちが悪い)、そのような固定表現を「」付きで記した。²

なお、調査対象とした格助詞10種類のうち、「まで」「より」は、それらが使用されなければならない

文脈（いわゆる、義務的生起文脈）が一度も観察されなかったため、結局、今回は分析対象外となった。

5.1 「が」の観察結果

表4は「が」の観察結果、(2)は「が」の発話例である。まず、2ヶ月目に脱落と正用が1度ずつ観察された。ただし、この時観察された正用は、「気持ちがいい」を1つのまとまった表現として用いたものであった。その後、3、4ヶ月目には脱落が多く観察され（両月とも全体の83%）、また、正用、代用「*は」「*の」「*へ」も観察された。代用のうち「*へ」はいずれも「*どこへ」と誤ったものだった。

表4 「が」の使用状況

滞在月数（カ月目）	2ヶ月目	3ヶ月目	4ヶ月目
適格			
が	—	1 (2%)	15 (9%)
「気持ちがいい/悪い」	1	—	1 (1%)
脱落			
φ → が	1	33 (81%)	86 (52%)
φ → が/は	—	1 (2%)	49 (30%)
φ → が/も	—	—	1 (1%)
代用等			
*は → が	—	1 (2%)	8 (5%)
*の → が	—	2 (5%)	2 (1%)
*へ → が	—	3 (7%)	—
分析困難	2	—	2 (1%)
合計発話数	4	41	164

(2) 「が」の発話例：

①適格

- a. 嬉しいは気持ちがいい？ (2ヶ月目)
- b. <吐き気の原因について話している> これが終わったベツ。(3ヶ月目)
- c. 市川先生は何が好き？(4ヶ月目)
- d. あの多分北京と上海は多分16か16何だっけ？ 時間がん違う。(4ヶ月目)
- e. 日本の枕はね中に白のちっちゃいのがはいっ<R: 入るっていうのかな 小さいのがあるよね> そうこれはね声ある。(4ヶ月目)

②脱落

- a. わたしは好きゲームファミコン (が)。(2ヶ月目)
- b. 昨日僕は遊ぶの遊ぶのとき頭 (が) 痛いです。(3ヶ月目)
- c. 授業 (が) 終わったらみんなは帰る。(4ヶ月目)
- d. なんか日曜日 えーと時間 (が) あれば少しの時間遊ぶ。(4ヶ月目)
- e. <R: 児童館行った？> そう うん 月曜日 児童館 (が/は) 休み。(4ヶ月目)
- f. <R: (太極拳を) TVで見た時はゆっくりやってた> そう ゆっくりの (が/も) ある。
<R: ゆっくりもある？> そう、ゆっくりと早い。(4ヶ月目)

③代用等

- a. *学校の (→が) 終わった僕は遊ぶですね。(3ヶ月目)

- b. 昨日 僕は 保健室行くだ。<R: どうしたの?> 遊ぶときは 足の (→が) えっと 痛い。<R: 転んだの?> そうです。(3ヶ月目)
- c. <R: (絵の説明) どうして泣いてるの?> *えっと ここはね お腹は (→が) 痛い。ないてる。
<R: そうだね可哀想だね> *先生はね どこへ どこへ (→が) 痛い? *えっと どこへ (→が) 痛い? お腹 (が) 痛い。(3ヶ月目)
- d. <R: じゃあL君 (が皆に) きいて> *え 僕は (→が) 聞いて? (4ヶ月目)
- e. 僕は忙しくない<R: 勉強してるじゃない> *勉強は (→が) 終わったら遊ぶ。(4ヶ月目)

④分析困難

- a. <R: これL君が書いたの?> これここがおかあか。(2ヶ月目)
- b. <氷という字を書きたい> 字がんは (→字は?字が?) みずこれみずはこれ?(2ヶ月目)
- c. 今日はね えと 学校は 戦争 戦争の話は <R: 戦争の話はするの?誰が?> えと 戦争の話 誰かの話 ね僕は知らない。<R: 今?> 今あと2時間目がかかもしれない。(4ヶ月目)

表5 「を」の使用状況

滞在月数 (カ月目)	2ヶ月目	3ヶ月目	4ヶ月目
適格 を	—	1 (3%)	11 (30%)
脱落 φ→を	3	20 (63%)	14 (38%)
φ→を/は	—	—	2 (5%)
代用等 *は →を	—	6 (19%)	4 (11%)
*の →を	—	1 (3%)	1 (3%)
*に →を	—	—	2 (5%)
*が →を	—	—	1 (3%)
過剰 *をは →は	—	1 (3%)	—
分析困難	1	3 (9%)	2 (5%)
合計発話数	4	32	37

5.2 「を」の観察結果

表5は「を」の観察結果、(3)は発話例である。2カ月目以降、「を」の脱落が観察され、3カ月目には適格構造の他、代用[*は][*の]や過剰生成も観察されるようになった。4カ月目には「を」の適切な発話が増加したが、代用も観察された。代用で用いられた助詞は2種類から[*は][*の][*に][*が]の4種類に増加した。

(3) 「を」の発話例

①適格

- a. <R: これは何をしてる男の子?> 野球はしてる、野球をしてる。(3ヶ月目)
- b. ズボン着るじゃない。<R: はく> はく。えと服を着る。ズボンをはく。(4ヶ月目)
- c. <R: 跳び箱の上を回るの?> そう。<R: 先生?> えっと 中国 違う。跳び箱は手を当てて。
<R: ピョーンって跳ぶんだろ?> うん。(4ヶ月目)
- d. <R: (絵の話) 何をしている?> テレビを見てるところ。(4ヶ月目)

②脱落

- a. 僕 運動会はこれ (を) やる。<R: ああ、綱引きね> (2ヶ月目)

- b. <遊びの内容> それから本 (を) 読んでる。んとーテレビ (を) 見てる。(3ヶ月目)
 c. <R:おにぎり自分で作った?> うんそれから自分でのね おにぎり (を) 食べた。(4ヶ月目)
 d. 中国 この名前 (を/は) 忘れた。(4ヶ月目)

③代用等

- a. *昨日は昨日 夜 ドラゴンボールは (→を) 見る。(3ヶ月目)
 b. <R:シャツを着るって言うよね。これは何だろう?> *ズボンの (→を) 着るだ (3ヶ月目)
 c. <絵の説明> *新聞に (→を) 読んでるかな 読んでる。(4ヶ月目)
 d. <R:これは何だ?> *お土産が (→を) <R:どうぞって> あの もらった かな? <R: この人は
 もらったんだけど、この人は渡す> あ 渡す か。(4ヶ月目)

④過剰生成

- a. <R:絵を描いてる?> *絵をは (→は) 山猫。(3ヶ月目)

⑤分析困難

- a. 私のうちに一緒にゲームをうん遊びサッカー。(2ヶ月目)
 b. 宿題 終わった。それから テレビをそれから遊ぶ。これは 6時ですね。(3ヶ月目)

表 6 「に」の使用状況

滞在月数 (カ月目)		2ヶ月目	3ヶ月目	4ヶ月目
脱落	*φ → に	0	10 (50%)	20 (36%)
	φ → に	0	0	1 (2%)
正用	に	0	3 (15%)	23 (41%)
代用等	*は → に	0	6 (30%)	1 (2%)
	*で → に	0	1 (5%)	2 (3%)
	*の → に	0	0	1 (2%)
	*へ → に	0	0	8 (14%)
合計発話数		0	20	56

5.3 「に」の観察結果

表6は「に」の観察結果、(4)は発話例である。3ヵ月目に脱落、正用、代用「*は」「*で」が観察された。4ヵ月目には正用が増加し、代用は減少したが、代用の種類は「*は」「*で」「*の」「*へ」の4種類に増加した。代用のうち「*へ」は全て「*どこへ」と誤ったものであった。

(4) 「に」の発話例

①適格

- a. <R:学校にゴキブリいる?> あるよ。学校 んー 昨日 違う んー 火曜日 そう 火曜日は教室にゴキブリあるよ。(3ヶ月目)
 b. <R:社会の勉強しないのかな?> 社会 社会の時に 地図の勉強。(4ヶ月目)
 c. なんにしよっかなー。(4ヶ月目)
 d. これの中に <R:井川のあるね大井川鉄道> これの中に寝る いいね いいですか? (4ヶ月目)

②脱落

- a. *先生はあの先生は朝ごはんは何時(に)食べた?(3ヶ月目)
- b. <R:先生に見せてるんだよね>*先生(に)見せる。(3ヶ月目)
- c. *ゴミ箱の下(に)新聞ある。(4ヶ月目)
- d. *一輪車の上(に)座る。(4ヶ月目)

③代用等

- a. *6時25分遊ぶ。*それから8時は(→に)夜ご飯。*9時は(→に)寝る。(3ヶ月目)
- b. ご飯?夜のご飯?*夜のご飯はお父さんは5時半は(→に)帰る。(4ヶ月目)
- c. *朝ご飯は何時で(→に)何時に<R:何時に食べましたか?>何時(に)食べた?(4ヶ月目)
- d. *11時の(→に)寝る。(4ヶ月目)
- e. *えっと傘はどこへ(→に)ありますか?(4ヶ月目)
- f. *じゃみかんはどこで(→に)ある?(4ヶ月目)

5.4 「の」の観察結果

表7は「の」の観察結果、(5)は発話例である。2ヵ月目に脱落と正用が観察された。3、4ヵ月目には正用の回数・割合が増加したが、代用等の誤りや過剰生成も観察されるようになった。代用等の誤りのうち「*での」は「*自分/自分達での」という表現で用いられていた。

(5)「の」の発話例

①適格

- a. <R:誰の時計?> 先生の時計。(2ヶ月目)
- b. 私のうちにいっしょにゲームをうん遊びサッカー。(2ヶ月目)
- c. <R:ヨウ君は中国の時から知ってたの?> そう中国の友達。(3ヶ月目)
- d. <R:社会の勉強しないのかな?> 社会 社会の時に 地図の勉強。(4ヶ月目)

②脱落

- a. <R:これは丸い顔ね これは三角の顔> *三角(の)顔。(2ヶ月目)
- b. <漫画の本について>*小学校(の)友達は貸してくれる。(2ヶ月目)
- c. *中国は水は日本(の)水は中国(の)水同じじゃない。(3ヶ月目)
- d. <R:お母さんは日本へ来る前日本語は出来たのかな?> 来る前?え?うんそう。
*中国ね日本語(の)勉強。*僕は忙しいだから日本語(の)勉強はない。(4ヶ月目)

③代用等

- a. *北京は(→の)友達 体育は相撲。(3ヶ月目)
- b. <R:(カスタネット)ないのかな?>*北京の僕は(→の)学校はあるよ音楽。(3ヶ月目)
- c. <R:L君は(服を)自分でたたむ?>*そう自分で(→の)服自分でたたむ(4ヶ月目)
- d. <R:出し物>*友達は自分たちで(→の)出し物?*自分で(→の)ある。(4ヶ月目)

表7 「の」の使用状況

滞在月数 (カ月目)	2カ月目	3カ月目	4カ月目
適格 の	13 (52%)	70 (65%)	239 (80%)
脱落 *φ → の	12 (48%)	13 (12%)	19 (7%)
代用等 *は → の	—	4 (3%)	1 (0%)
*はの → の	—	2 (2%)	4 (1%)
*での → の	—	—	6 (2%)
過剰 *の → φ	—	15 (14%)	21 (7%)
*の → は	—	1 (1%)	—
*好きの → 好きな	—	1 (1%)	—
分析困難	—	2 (2%)	8 (3%)
合計発話数	25	108	298

④過剰生成

- a. *みんなは小さいの (→φ) 運動場練習。(3ヶ月目)
- b. <R: これは何してるウサギ? > *泣いてるの (→φ) ウサギ。(3ヶ月目)
- c. <R: 図書室あるかな? > *ありますうん 図書室好きの (→好きな) 本は借りる。(3ヶ月目)
- d. 日曜日は勉強 学校の勉強。<R: 皆は? > 違う日曜日? *日曜日の (→は) 遊ぶだよ。(4ヶ月目)
- e. <R: 皿は何枚ありますか? > 何枚? *5枚の (→φ)、5枚の (→φ) ある。(4ヶ月目)

⑤分析困難

- a. <絵の説明> これはね1時間目の 始めるのです。(→の始め?を始める?) (3ヶ月目)
- b. <遊びの話> 何の えーと サッカー 遊ぶ。(4ヶ月目)
- c. <R: お父さん勉強してるね> お父さんはえっとうちの (→の?で?) 勉強。(4ヶ月目)
- d. えっとうちは ゲームの 遊ぶ (→ゲームの遊び?ゲームで遊ぶ?)。(4ヶ月目)
- e. <R: (双六は) 中国にもある? > ある。たくさんあります。うん友達の遊ば。(4ヶ月目)

5.5 「で」の観察結果

表8は「で」の観察結果、(6)は発話例である。2カ月目に正用と代用等の誤りが観察された。正用は「あとで」が1回であり、代用等の誤りは6回のうち5回が「*に」を用いたものだった。3、4カ月目には「あとで」以外にも正用が観察され、同時に脱落や代用等の誤りも観察された。代用には3ヶ月目は「*は」「*の」、4カ月目は「*に」「*は」「*の」「*でが」があった。

表8 「で」の使用状況

滞在月数 (カ月目)	2カ月目	3カ月目	4カ月目
正用 で	—	7 (41%)	15 (47%)
「あとで」	1 (14)	3 (17%)	—
脱落 *φ → で	—	1 (6%)	7 (22%)
代用等 *に → で	5 (72)	—	1 (3%)
*は → で	—	2 (12%)	1 (3%)
*の → で	—	3 (17%)	2 (6%)
*でが → で	—	—	1 (3%)
「*あとでは」 → 「あとで」	1 (14)	—	—
分析困難	—	1 (6%)	5 (16%)
合計発話数	7	17	32

(6)「で」の発話例

①適格

- a. <R: おかわりあるかな給食の時> 違う 全部終わったは自分で 行きます。(3ヶ月目)
- b. <R: L君は(スキーを)する?> そうあるよ。北京であるよ。面白い。(4ヶ月目)
- c. えとこれ漢字でないね。(4ヶ月目)
- d. 僕は自分で全部宿題終わった、手はいてえだ。(4ヶ月目)
- e. <R: 何が好きとか教えてあげて> 何でもいい?(4ヶ月目)

②脱落

- a. <R: 体育の時間にやるの? 休み時間?> *そう みんなは小さいの運動場(で)練習。(3ヶ月目)
- b. *最後んとファミコン(で)遊ぶ。(4ヶ月目)
- c. *全部日本ていうこれ日本語(で)何て言う?(4ヶ月目)
- d. *新宿はにっほん(で)2番かな。<R: 2番だね、2番目に大きい町>(4ヶ月目)

③代用等

- a. *3年生アキヒト君一緒に私のうちに(→で)一緒にゲームをうん遊びサッカー。(2ヶ月目)
- b. <R: 日本語で何て言いますか>*日本語に(→で)あ日本語で何て<R: 言いますか>(2ヶ月目)
- c. 遊ぶ。<R: 学校で遊ぶ?>*学校の(→で)遊ぶ。(3ヶ月目)
- d. *蛙の足はんーお母さんはお金蛙の足。それからうちは(→で)料理。(3ヶ月目)
- e. <R: (番号を)みな覚えてるの?> そう。*僕自分でが(→で)どこで、覚えたよ。(4ヶ月目)

④分析困難

- a. <R: (絵で場所当て)ここは?>靴と靴。どこで?靴箱。<R: そうそう>(3ヶ月目)
- b. <R: 何の実験?> 向こうある向こうの教室。車。これで。これ。(4ヶ月目)
- c. <R: (犬と猫を間違えた)猫は首輪がないの> これいっばい猫は自分でから?(4ヶ月目)

5.6 「と」の観察結果

表9は「と」の観察結果、(7)は発話例である。まず、2ヵ月目に脱落が観察され、その後、3ヵ月目に適格構造と代用「*の」が観察された。4ヵ月目には適格構造の回数・割合が増加した。

表9 「と」の使用状況

滞在月数(ヵ月目)	2ヵ月目	3ヵ月目	4ヵ月目
脱落 * \emptyset → と	4 (80%)	4 (57%)	6 (38%)
正用 と	—	1 (14%)	8 (50%)
代用等 *の → と	—	2 (29%)	1 (6%)
*に → と	—	—	1 (6%)
分析困難	1 (20%)	—	—
合計発話数	5	7	16

(7) 「と」の発話例

①適格

- a. <R: (小さい) 魚見てきたよね> 外は勉強終わった、私と先生と一緒に小さい。(3ヶ月目)
 b. <R: 一人でゲームやってたの?> この前は? うん 違うよ。全部 友達と。(4ヶ月目)
 c. <R: 児童館大きい?> うんと大きいね。えと学校の小さい運動場と一、と同じ。(4ヶ月目)
 d. 北京たいく学院と んどこへちょっと近い近いのはあのバスはさんびやくろく号。(4ヶ月目)

②脱落

- a. <動詞の意味について質問> *これ読んでるは見る (と) 同じ? (2ヶ月目)
 b. <R: どこで遊ぶの? 公園?> うん サッカー。*サッカー塚本 (と) 一緒にサッカー。(2ヶ月目)
 c. 学校授業終わったら、一輪車は全部ない。友達、僕は友達 (と) んー 鬼ごっこ。(3ヶ月目)
 d. *日曜日の夜僕はお父さん (と) 東京行く。(4ヶ月目)

③代用等

- a. *私は、んと、名古屋のヨウ君、友達の (→と) 一緒に遊ぶ。(3ヶ月目)
 b. <R: 家でサッカーしない?> サッカーありますよ。*アキヒトの (→と) 一緒に遊ぶ。
 (3ヶ月目)
 c. <R: 自分で勉強してる?> そう 自分で。音楽じゃない えと テープ、日本語のテープ勉強。*教科書の (→と) 一緒に、勉強。(4ヶ月目)
 d. <R: 3日間何やってたの?> *あのー 友達に (→と) 遊ぶかな。(4ヶ月目)

5.7 「から」の観察結果

表10は「から」の観察結果、(8)は発話例である。正用は2ヶ月目に観察されたが(例: 中国から参りました)、自己紹介として暗記していたものであった。これ以外に正用が観察されたのは4ヶ月目であった。3、4ヶ月目には代用「*は」が観察された。脱落は観察されなかった。

表 10 「から」の使用状況

滞在月数 (カ月目)	2カ月目	3カ月目	4カ月目
正用 <u>から</u>	—	—	4 (57%)
「中国から参りました」	1	—	—
代用等 *は → <u>から</u>	—	1	1 (14%)
分析困難	—	—	2 (29%)
合計発話数	1	1	7

(8) 「から」の発話例

①適格

- a. <R: (縄跳びが) 一番上手だったクラスは?> えっと 初めから みんなは心配 えと きんちょう 違うんと <R: 緊張した?> うん 速く 頑張れだから たくさんは駄目。(4ヶ月目)
 b. <クイズを出す順番について> これから 僕は? <R: いいよもう一回> (4ヶ月目)

③代用等

- a. <R: 家からここまで5分くらい?> *家は (→から) 学校は 道路は 近いですね。(3ヶ月目)

- b. <R: (出し物)秘密にしてるんだ> そうその趣味は初めから自分でだ・・だからみんなはびっくり。
<R: そうなんだ> *前は (→から) 知ってるじゃ 楽しみは面白くないです。(4ヶ月目)

④分析困難

- a. <R: 右へ曲がって左へ曲がるよね> あっ左。あの、こうから、これ、右から? (4ヶ月目)
b. <跳箱の説明> 足を例えばこれかここはここ僕はこれここから足がここですね。(4ヶ月目)

5.8 「へ」の観察結果

表11は「へ」の観察結果、(9)は発話例である。脱落は3ヶ月目に観察されたが、適格構造は1度も観察されなかった。4ヶ月目には代用「*で」が観察された。

表 11 「へ」の使用状況

滞在月数 (カ月目)	2カ月目	3カ月目	4カ月目
脱落 φ → へ	—	1	20 (83%)
代用等 *で → へ	—	—	2 (8%)
分析困難	—	1	2 (8%)
合計発話数	0	2	24

(9) 「へ」の発話例

①適格

発話例なし

②脱落

- a. *今日僕は保健室 (へ) 行くだ。(3ヶ月目)
b. <R: (絵) 来るっていう言葉かな? 町へ> 町 <R: 何? > *えっと町 (へ) 来る。(4ヶ月目)
c. *デパートまっすぐそれからえと左 (へ) ま、まがる。(4ヶ月目)

③代用等

- a. <R: お父さんやお母さんとどこか行った? お休みのとき> 土曜日は? お母さん名古屋行く。
*あの一日曜日はどこで (→へ)、あ、日曜日の夜、僕はお父さん東京行く。(4ヶ月目)
b. <R: 新宿行ったことある? > ううん。*あのえっと夏休みそのころの家族の僕はとお父さんとお母さん一緒に東京で (→へ) あの渋谷かな? (4ヶ月目)

④分析困難

- a. <R: 先生いなかったの? じゃどうしたの? > 先生はない。どこへは知らない。(3ヶ月目)
b. 北京たいく学院とどこへちょっと近い近いのはあのバスはさんびやくろく号。(4ヶ月目)

6. 考察

以上の結果を基に、L児の格助詞の発達過程の特徴をまとめ、先行研究と比較したい。まず、1つ目の特徴は、「から」を除く7種類の格助詞で脱落が観察された点である。これらの脱落が観察され始めた時期を、適格構造の出現時期と比べたものが表12である。³ 表12には、各格助詞で脱落および正用が

観察され始めた時期「～ヵ月目」と観察月日を記した。

表 12 L 児の格助詞における脱落と適格構造の発話時期 (ヶ月)

	が	を	に	の	で	と	から	へ
脱落	2(9.24)	2(9.24)	3(10.7)	2(9.16)	3(10.7)	2(9.16)	—	3(10.28)
適格	3(10.7)	3(10.14)	3(10.14)	2(9.16)	3(10.21)	3(10.7)	4(11.18)	—

脱落に関して、格助詞には会話で省略可能なものもあるため(「が」「を」)、L児の脱落が省略か誤りかを判断することは容易ではない。しかし、仮にL児が格助詞の使い方を認識した上でこれらを省略したとすれば、正用(例:TVを見る)が出現してから脱落(例:TV見る)が出現する可能性や、正用と脱落が同時に出現する可能性も否定できない。ところが、「が」「を」では脱落の方が早く観察されていた。このことから、省略可能な格助詞の場合も、L児は格助詞を認識できずに脱落していた可能性が高いと考えられる。この点を踏まえ、脱落が観察され始めた時期を見てみると、「の」は正用の出現と同時であったが、他の格助詞では、まず脱落が観察され、その後、正用が出現していた。格助詞の習得の初期に脱落が観察されるという特徴は、幼児2名(L1はポルトガル語)の「に(存在場所)」「で(動作場所)」を調査した久野(2003)や、児童3名(L1は英語あるいは中国語)の名詞句構造での「の」を調査した白畑・久野(2005)でも報告されている。したがって、学習者のL1は異なっても、ほとんどの格助詞の発達過程の最初期には、脱落の段階があるのではないかと推測される。

L児に見られた2つ目の特徴は、格助詞によって正用の出現時期に違いが見られた点である。格助詞のうち「の」は出現が比較的早かった。これに対し、正用「へ」「まで」「より」は観察されなかった。先行研究でも、松本(1998、2000)の被験者(L1は中国語)、および、竹中(2001)の被験者(L1はタガログ語)ともに、「の」の出現時期は比較的早いものに対し、「へ」「まで」「より」の出現時期は比較的遅いか、あるいは出現していない。このことから、学習者のL1は異なっても、格助詞の出現には比較的早いものと遅いものがあり、中でも「の」の出現が早く、「へ」「まで」「より」が遅いという点で共通点が見られた。ただし、正用が出現し始めた時期はL児が2ヵ月目だったのに対し、松本(1998)、竹中(2001)では4ヵ月頃であった。つまり、L2児童には、格助詞が出現し始める時期に多少の違いはあるものの、その出現順序には類似した傾向が見られたと言える。

3つ目の特徴は、L児には脱落の他、代用等の誤りや過剰生成の誤りが観察された点である。表11は格助詞ごとの脱落、代用等の誤り、過剰生成の誤りを示したものである。過剰生成は「を」「の」で観察され、代用等の誤りは全ての格助詞で観察された。代用として用いられた助詞は「*は」「*へ」「*の」「*が」「*に」「*で」など様々であったが、このうち「*は」「*の」(両方または片方)は7種類の格助詞で用いられていた。

表 13. L 児の適切な格助詞以外の助詞の発話

	が	を	に	の	で	と	から	へ
脱落	φ	φ	φ、*φ	*φ	*φ	*φ	—	φ
代用等	*は *へ *の	*は、*の *に、*が	*は、*で *へ、*の	*は *はの *での	*に、*の *は、*では *でが	*の *に	*は	*で
過剰	—	*過剰	—	*過剰	—	—	—	—

これらの結果を先行研究(松本、1998、2000;竹中、2001)と比較すると、「の」の過剰生成が観察された点や、多くの格助詞で代用の誤りが観察された点で共通点が見られる。代用の誤りのうちL児と

共通しているものは、松本（1998, 2000）の場合、「に」「を」を「*の」で代用、「で」を「*に」で代用、「が」を「*は」で代用、「を」を「*が」で代用、「に」を「*で」で代用したものなどがあり、竹中（2001）の場合、「が」を「*の」で代用、「を」を「*が」で代用したものなどがある。ただし、L児に見られたように、「*は」「*の」によって多くの格助詞が代用されたかどうかは、資料からは明らかでない。

7. 結論

本稿では、中国人児童Lの来日後3ヵ月間（滞在2～4ヵ月目）の発話データを基に、9種類の格助詞の発達過程を調査した。その結果、明らかとなった特徴は以下（10）に記すとおりである。

（10）L児の格助詞の発達過程の特徴

- a. 「が」「を」「に」「の」「で」「と」「へ」では脱落が観察された。「から」は脱落が観察されなかった。脱落が最初に観察された時期は、適格構造が出現する前、あるいはそれと同時であった。
- b. 適格構造の出現時期は格助詞によって異なっていた。比較的早く出現したのは「の」であった。これに対し、「へ」「まで」「より」の適切な使用は観察されなかった。
- c. 誤りには脱落の他、「を」「の」では過剰生成、「が」「を」「に」「の」「で」「と」「から」「へ」では代用の誤りが観察された。代用として「*は」「*へ」「*の」「*が」「*に」「*で」などが用いられたが、このうち「*は」「*の」は多くの格助詞で代用として用いられていた。

この特徴のうち(10a)は、格助詞の発達過程の最初期に脱落が見られるという点で、久野（2003）や白畑・久野（2005）の報告と類似点が見られた。また、(10b) (10c)は、格助詞の出現順序や誤りの傾向という点で、松本（1998, 2000）や竹中（2001）の報告と類似点が見られた。ただし、これまで、全ての格助詞を対象に、脱落を含めて調査を行なった研究はほとんどない。したがって、本調査で得られた、様々な格助詞の発達過程の最初期に脱落が観察されたという結果は、今後のL2児童あるいはL2学習者の格助詞の発達過程を解明する上で、何らかの示唆を与えるものと思われる。今回は基礎研究として4ヵ月間の発話データを調査したが、今後、5ヵ月目以降の発話データも調査し、格助詞の発達過程のさらなる解明を目指したい。また、今回は全く手付かずであったが、発話データの記述だけに留まらず、その裏に潜む習得のメカニズムを理論的に説明する試みも今後進めていきたい。

引用文献

- 井内麻矢子（1995）「初級日本語学習者による助詞「は」「が」「を」の習得過程」『言語文化と日本語教育』9号 お茶の水女子大学日本言語文化研究会 pp.246-256
- 今井洋子（2000）「上級学習者における格助詞「に」「を」の習得—「精神的活動動詞」と共起する名詞の格という観点から—」『日本語教育』105号 pp.51-59
- 久保田美子（1994）「第二言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—」『日本語教育』82号 pp.72-85
- 長谷川ユリ（1993）「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80号 pp.158-168
- Hawkins, R. (2001) *Second Language Syntax*. London: Blackwell.

- 久野美津子 (2003) 「ブラジル人幼児の場所表現「に」と「で」の習得過程」『日本語教育』117号 pp.83-92
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』東京：くろしお出版
- 松田由美子・斎藤俊一 (1992) 「第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』vol.2 pp.129-156
- 松本恭子 (1998) 「ある中国人児童の助詞の使用実態：1年間のケーススタディーを通して」『ジャーナルCAJLE』2 カナダ日本語教育振興会 pp.24-38
- . (2000) 「ある中国人児童の来日2年間の助詞機能の使用状況—発話資料と作文資料の縦断調査報告—」『日本語教育論集』16号 国立国語研究所 pp.1-22
- 丹羽哲也「無助詞格の機能」『国語国文』vol.58 第10号 東京：中央図書出版
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 小川芳男・林大・他編集 (1982) 『日本語教育事典』東京：大修館書店
- 迫田久美子 (1990) 「話しことばの誤用分析研究」『教育学研究紀要』36巻 中国四国教育学会 pp.116-121
- 白畑知彦 (1993) 「幼児の第2言語としての日本語獲得と『ノ』の過剰生成—韓国人幼児の縦断的研究—」『日本語教育』81号 pp.104-115
- . (2001) 「普遍文法の視点」『日本語教育学を学ぶ人のために』京都：世界思想社 pp.120-135
- ・久野美津子 (2005) 「L2児童による日本語名詞句構造内での「ノ」の習得」*Second Language*, 4, 29-50. 日本第二言語習得学会
- 竹中理恵 (2001) 「タガログ語を母語とする児童の発話における助詞の使用実態—1年間のケーススタディーを通して—」『南山日本語教育』第8号 pp.260-299
- Yagi, K. (1992) “The accuracy order of Japanese particles” 『世界の日本語教育』第2号 pp.15-25
- 八木公子 (1996) 「初級学習者の作文に見られる日本語の助詞の正用順序—助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に—」『世界の日本語教育』第6号 pp.65-81

1 例えば「座る、立つ、寝る」などと共に用いられる場合の到達点を表す「に」は省略可能とする説もある(益岡・田窪1987)が、本稿の第一著者を含め、インフォーマントとして尋ねた大抵の日本語母語話者が「に」や「へ」の省略は不自然であるとみなしている。したがって、本稿でも「に」「へ」の脱落された発話を誤りとみなし「* ϕ 」と記した。

2 発話例の読み方について、<>内には観察者(R)の発話や、L児が発話した時の状況などを記した。また、「(→と)」とは、本来使用すべき格助詞が「と」であることを表す。

3 「が」「で」「から」の場合、「あとで」「気持ちがいい」「中国から参りました」という構造が2ヵ月目に観察された。しかし、このような挨拶表現や固定表現は単なる模倣による可能性も捨て切れない。さらに、同様の発話は母語(L1)の幼児にも観察されるという(白畑, 2001)。したがって、本稿ではこれらの表現の出現時期を適格構造の出現時期とはみなさなかった。